

かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 68 号

平成 3 年 5 月 15 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



神楽岡公園

第19回入学式辞……………学 長… 2	研究室紹介……………衛生学講座… 9
新人生記念写真…………… 3	研究室紹介……………泌尿器科学講座… 9
平成3年度入学者名簿…………… 3	平成3年度大学院入学者名簿……………10
大学で学ぶことへの問いを一新入生へ岡田雅勝… 4	平成2年度学位記受領者名簿……………10
新入生を迎えて……………竹田 扇… 5	教官の異動……………10
新入生を迎えて……………山本健治… 5	第13回卒業証書授与式……………10
駐車場問題専門委員会より…………… 6	第1回新入生研修実施される……………10
「起死回生」への手探り	平成3年度入学式……………11
～あるいはマンパワーと大ナタ～医大祭実行委員会 7	東医体夏季・冬季総合優勝ノ……………11
平成3年度の主な行事…………… 7	東医体冬季総合準優勝ノ……………11
平成3年度運営組織…………… 7	アイスホッケー部旭川市長杯2連覇なるノ……………11
留学生寄稿	学生の定期健康診断の実施について……………12
旭川医大での留学生生活を認んで…李 万瑶… 8	窓 外……………加地 隆…12



第19回入学式式辞

学長 下 田 晶 久

皆さん入学おめでとう！

今年もまた若さに溢れた新入生諸君と共に、旭川医大に春の季節が訪れました。入試の難関に挑み、合格を勝ち得た皆さんの長年の努力を思う時、我々教職員一同もまた大きな喜びと期待を抱いて皆さんを迎え入れます。

申す迄もなく皆さんは全員が医学を学ぼうと決意し、選ばれて今旭川医科大学への入学を果たした訳ですが、その昔、王陽明と言う中国の儒学者は、弟に与えた手紙の中で、「学ぶに当たってはまず志を立てること、志がしっかりしていなければ、根の付いていない畑の作物に肥料や水を与え続けるようなもので、いくら苦労しても収穫には至らない、つまり学業を成し遂げる事は出来ない」と論じて居ります。

問題は、卒業まで6年、さらに臨床研修や大学院を含めると、最も短くて8年ないし10年の歳月を要する長い医学への道です。出発に当たって立てた志は、果たしてぐらつかずに保ち続けられるでしょうか。恐らく、自分を厳しく責めてこれを守ろうと努めるだけでは難しいと思われれます。志を堅く保つには、学年の進行に伴って拡大する各自の視野に合わせて、これを深める工夫が必要です。その為には決して独り孤立することなく、友人、先輩、教官と胸を開いて語り合う機会を、出来るだけ多く持つように心がけて下さい。

我が国の高等教育制度は、第二次大戦後大きく変わって、大学教育の中に教養課程と専門課程という、二つの独立したコースを積み重ねた、二重構造が取り入れられました。それぞれの課程は、教養部と学部と言う別々の組織によって教育されるのが、日本の大学の一般的な形態と成ったのであります。歳月を重ねてこの制度が定着する一方、やがてその短所が取沙汰されるに至り、教養部改革論議が持ち上がって既に久しいのであります。

皆さんも新聞などで目にして居る事と思いますが、最近、大学審議会はこの問題に一つの方向を打ち出しました。それは高等教育の対象と成る年代の青年にとって、教養課程の内容は、人格形成に極めて重要である事を再確認する一方、重層構造を廃止して、これを専門課程の教育内容と密接に組み合わせて行うべきであるとの趣旨であります。今後は、多くの大学がこの線に沿った改革に取り組む事になるでしょう。

旭川医大は、昭和48年の開学に当たり、この問題を重視

して、逸早く6年一貫教育の制度を取り入れたのであります。それは、将来医師あるいは医学者と成る学生諸君には、先ず、高度に分化した幅広い医学知識を受け入れる為の、自然科学の基礎学力涵養に努める一方で、人文社会系科目を通して、医人の自覚に根差した人間社会への理解を深める事から始め、学年が進むにつれて増加する専門教科の学習と並行して、各自の豊かな人間性を培う努力をも、6年間を通して続けて貰わなければならないからであります。

さて、昔から大学生は自主的に学ぶものとされて居りますが、大学に入った途端に百人が百人全てそうなるとは考え難い事です。十人十色と言われるように、人にはそれぞれの特質があって、学力の自己評価にしても、甘い人辛い人さまざまです。また不得手な科目にはどうも積極的になれないままに、逃避してしまうなどは屢々見受けられる姿です。6年分を一体のものとして組み立てられた本学のカリキュラムは、各学年ごとの成果が順次確実に積み上げられて、初めてその目標が達成されるのであって、その為には、十人十色の学習態度を念頭に置いた最小限度のチェックを、学年ごとに行う必要があります。これが本学の取り入れている学年制であります。これらの制度の有効な活用は、一に掛かって皆さん自身の対応にあります。

本道最高峰の山々に抱かれて、四季の移り変わりが鮮明な、ここ旭川の恵まれた自然環境に身を委ねて、学習に思索にそして交友に、日々有意義な学生生活を築き上げて下さるよう、皆さん一人一人の初志の達成を、心から願って本日の式辞といたします。







大学で学ぶことへの 問いを—新入生へ

哲学教授
(第一学年担当) 岡田 雅 勝

新入生のみなさん、入学おめでとう。みなさんの学びの園は、恵まれた北の自然のただなかにあって、みなさんを迎えています。いま白銀に輝いてそびえ立つ大雪や十勝の峯々やそれらの山々から発する忠別川や美瑛川の流れなど学園をとりまく自然は、季節のめぐりとともにさまざまな装いをもって、みなさんを迎え、励まし慰めてくれることでしょう。北の風土は雄大で豊かではありますが、また厳しくもあります。こうした北の大気を存分に吸い、爽り豊かな学園生活を送っていただきたいとおもいます。

しかし毎日の大学生生活は、言うまでもなく自然の営みと同じくいつも蒼蒼色に輝いているわけではありません。入学にさいして、一日もはやく受験勉強の解放の喜びから脱却して、ひとりひとりが〈大学で学ぶこと〉の意味を考えて、地についた大学生生活を送るようにしていただきたい。みなさんは将来医師ないし医学研究者になる希望をもってこの大学に入ってきました。ですから、みなさんがめざす目的を成就させるために、まずさしあたって何をすべきかを自分自身に尋ねて、大学生生活の設計をして、それを実現させるように厳しく自分を律してください。

大学は諸科学の基礎的知識の修得の場であり、そのための努力は当然課せられるが、もう一つには〈人間であることに目覚めていく〉場であることをぜひ銘記していただきたいのです。〈ひとりの生命は地球より重い〉と言われるように、誰もが口先では、ヒューマンスティックでなければならないことを言いますが、真にヒューマンスティックになるための努力を怠ることが人の常でもあります。そこで、みなさんにまず第一に一般教育において、〈ヒューマンスティック〉に自己を啓発する機会を多くつくっていただきたいことをうながしたいのです。

カリキュラムにくまれている講義や実習などの知識や基礎的学習を刺激として知的に自分を啓発するように努力してください。ともすれば、留年しないような単位の修得だけが目的とされがちですが、けっしてそのようなことは考えないで、学問を積極的に学ぶ態度を養っていただきたいのです。嫌々ながらの、受け身の単位修得はけっして自分の身になりません。それとともに医学部に学ぶみなさんには、何よりも人間理解が必要とされます。そのためには人文社会系の諸科学に主体的になり、取り組んでいただきたいのです。そして〈人間の何か〉〈人

の命の何か〉を考えてもらいたいのです。

こうした人間理解の場は他にもたくさんあります。クラブ活動とかサークル活動、社会奉仕活動などとか、また内外の旅行なども貴重な体験となることだと思います。スポーツクラブでは身体の鍛錬はむろんのことですが、そこには人との交わりがありますし、友情の何かを体得できる場でもあります。青春を意義あるようにするために、多くの人々と交わり、さまざまな人生模様を体験し、自分を人格者とするための機会を多くもつようにしてください。孤独であることはいけません。独りであることは自分を精神的に落ちこませますし、自分の人生を侘びしいものにします。人間は仲間とともに生きる存在です。その意味で、人とのコミュニケーションをし、社交性を身につけ、青春の躍動や苦悩をともに分かちあえるような多くの友人をつくっていただきたいのです。人との交わりのただなかから、本当に多くのものを学びとれば、自分の内面にあるさまざまな可能性を引き出す大きな契機となるに違いありません。

どのようにして自分を育成するのはひとりひとりの課題になりますが、少なくとも大学に入ったからまず第一に車の免許をとるとか、いままでの受験という灰色の生活から解放されたのでおもしろい遊びなどとは考えないで欲しいのです。無論遊びのないような人生などはありませんし、遊びも知らないような人間などは、他人の存在とか、他人の悩みとか病いなど理解できるとは私には考えられません。しかしみなさんは大学生となったのです。そのことを第一に考えて欲しいのです。それを実行することを何よりも優先すべきだということです。

さらに、大学は一つの共同社会でありますから、みなさんはそこで生活することの自覚をもっていただきたいのです。どのコミュニティにも規律があるように、大学生活を送る以上はその規律に当然従わなければなりません。ですから、この大学で課している規律の何かを知っていただきたいのです。しばしばレルネン・フライハイト(学ぶ自由)ということが言われますが、そのことには規律の遵守が前提とされています。規律の遵守を通して始めて、大学で学ぶことの意味が理解され、自分の学園生活を潤いのあるものとすることができるでしょう。そのために入学にあたり〈大学で学ぶことの意味〉を自分に尋ねてください。

新入生を迎えて

第六学年 竹田 扇

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。皆さんはそれぞれが希望・抱負を抱いて新しく医学の勉強をスタートさせようとしている訳で、私達としても喜びにたえません。ここで皆さんの先輩として、主に大学における勉強について考えているところを2・3助言したいと思います。

まずこれは極めて当然の事ではありますが、皆さんは折角大学に入られた訳ですから積極的に自ら学んでいく姿勢を身につけていただきたいという事でもあります。これは何も専門領域に限っての話ではなく、人文・社会科学などの広い教養を身につけるといことも含みます。ここで注意しなくてはならないのは、大学における勉強は学問であり、自ら問題を見つけこれを解決するという主体的営みのもとで存立するという事で、与えられた問いに対する解答を探すといういわば受動的な姿勢ではないということです。大学でも一応テキストなるものは存在し、医師として必要な最小限度の共通項としての知識は問われる訳ですが、その他に皆さんの主体性が発揮されるべき場が無限に広がっているということなのです。従って皆さんはそれぞれの希望に応じて学びたいければ幾らでも深く追求することが可能となるでしょう。

新入生を迎えて

新入生歓迎実行委員会委員長 山本 健治

入学式の写真撮影の時、私はかたわらでその光景を見つめていた。新入生にとって最も華々しい瞬間である。フラッシュが光るまでの数10秒間、場内には沈黙と緊張の空気が漂っていた。新入生だけでなく、普段は大学で教鞭をとっている先生方までもが表情を堅くし、視線をカメラの方に固定している。この光景は新入生ではない私にまでも、ある種の緊張感を与えた。その緊張の中で、「あれから一年たったんだ。」という感慨と同時に様々な思いが私の胸中にわき出した。

一年前、これから旭川で新しい生活を始めるにあたって、私は一つの誓いをたてた。それは「何事も肯定的に受けとめよう。そして純粋な気持ちで人と接していこう。」ということである。この誓いを立てたさしたる理由はない。ただこれを実行することによって自分がもっと素直に生きられればいいと感じたからにすぎない。そしてこの一年間、私は消極的ながらも、この誓いを常に心に抱きながら生活をしてきた。

はじめのころは、新入生歓迎の時期でもあったので、いろいろな人に素直な態度で接していくことは、人に好印象を与え、かつ自己満足もできた。しかし、しだいに挫折感を感じるようになった。挫折感の原因の一つには、自分の弱さがある。しかし第一の原因は何よりも、理想と現実のギャップから生じる苦痛感であった。

この理想と現実のギャップは学内にもかなり感じるものがある。旭川医大は厳しい大学である。受験の際、大

医学は非常に広範な知識の集積より成る応用科学でありますから、きっと皆さんの興味をそそる分野を包含している筈です。それを皆さんの長い履修期間のうちに見つけ探究していただきたい。

次に学問に対する具体的な方法についてであります。上に述べたような姿勢をもとに、まず既成の知識に対して常に批判的に、そして思考過程を重視した勉強をして欲しいということです。「今わかっていることを全部集めても、これから知らなければならない残っていることに較べたら、ほとんど無に等しい…」(R.Descartes)という先哲の言葉をもって示されるように、これから皆さんが学んでいく医学知識の量は膨大なものであります。従って各知識の骨格となっている原理や法則的な事を考える余裕がないこともあるかも知れません。しかしその都度「何故そうなるのか」という疑問を絶やさず、これをもとにして更に知識を積みあげるという態度をとっていただきたいのです。そのようにして得た知識は本当に自分のものになる筈です。また批判的な目を養うということは、科学の進歩が既成概念の打破によってなされてきたことから重要なことは明らかです。

最後に、何事をなすにあたって也十分に心身両面で健康であることが最も基本となります。健康に留意して皆さんが悔いのない学生生活を送られることをお祈りして歓迎の言葉といたします。

学側から送られてきたパンフレットには「自由な学風」ということが強調されていたが、これは真つ赤な嘘であった。厳しいといってもそれが私たちにとって理想的なものになり得るのならそれで満足はできる。だが、出席カードを使って教養のうちから学生を長時間講義室の中に縛りつけることが本当の厳しさと言えるだろうか。それは逆に学生を消極的、無個性化へ導いてしまう恐れもあるのではないだろうか。この理想と現実のギャップは私には納得できない。その他にもいろいろ問題はあつた。そしてこの大学が嫌になつたこともしばしばであつた。

これらのことを通して私は「確かに理想なしに現実のワクの中で生きるのは器が小さい。かといって現実を知らずに理想を語るのは、“砂上の楼閣”のようなものになってしまう。」ということを知つた。大学においてもそうである。現実主義で功利的に生活することは、学生としては佗しすぎる。その反対に、理想ばかりにもえると大学を卒業することができず「医者」という自分の理想像を作ることさえ危うくなる。つまり大切なことは理想と現実のバランス感覚をもつことである。

最後に私は旭川医大に対する不満の解決法としてこれからは、「大学の体制を見るのではなく、教官という人間を見る」ことにしようと思う。最近、先生や学生課の方々と話す機会も増え、そのほとんどの方が個人的にはとても親切であることがわかつた。不満を心中に温め続けていると「制度＝教官」という誤解まで生じ、疑心暗鬼になってしまう。その疑いを解決するためにも、教官と学生の個人的な理解が不可欠であり、それこそが旭川医大の学生生活を満足させるための第一歩であると思う。

駐車場問題専門委員会より

平成2年度の駐車場問題専門委員会では、

①来院者用駐車場の適正な運用

②不法駐車に対する規制

を主な課題として取り組んできました。その結果と問題点について報告いたします。

①来院者用駐車場について

この駐車場は224台収容可能ですが、常時混雑しており来院者に大変迷惑をかけています。その原因としては、駐車場の入口付近より駐車を始めるため奥に駐車スペースがあっても判らない、職員や学生の違法駐車が、身障者専用の駐車場に健常者が駐車している、などがあげられます。これらの問題の改善策として平成2年8月27日から平成3年3月29日まで外部委託による警備員を2名病院入口付近に配置し、午前7時30分から正午までの間入構車両の規制を実施しました。実施内容は、職員の駐車許可証の確認、通院患者の診療カードや保険証等による確認、見舞客・商社員については用件、身分の確認、及び病院周辺の路上駐車への警告等であります。この規制方法は大変効果的であり混雑はかなり緩和されました。しかし、問題点もいくつかあげられています。主なものとしては、絶対的な駐車スペースが足りない、入構のピーク時には警備員2名では許可証等の確認が難しい、退職者の許可証を悪用する者がいる。又、警備員の制止を振り切って入構する悪質な学生も見られるなどあります。

これらの改善策として看護婦宿舎の南側に60台程度収容可能な臨時の仮設駐車場を増設し、又、平成3年度より警備員を3名としました。

②不法路上駐車に対する規制

職員・学生の不法駐車を解消するには、駐車場の大幅な増設が必要となります。当委員会では、誠意検討いたしました。が、予算面も含めて残念ながら当面実現は不可能との結論に達しました。従って現有駐車場の適正な運用と不法駐車の規制に重点を置きました。

学部側の車両通行に関しては不法駐車の排除及び歩行者の安全を確保する対策として、事務局前の路上は鎖付きポールで歩道を分離し、いわゆるロータリー方式を取り入れました。この方式の採用で路上駐車を完全に締め出すことができ、また歩行者の安全も確保され好評を得ています。

しかし、他の路上では、相変わらず不法駐車が目立ち頭を悩ませています。その対策として、通行止めや進入禁止箇所を増やし鎖やフラワーポットを設置しました。しかし、その結果学生用駐車場と体育館の間の芝生上を通り抜ける車や体育館側の通用門に設置した鎖を切断して入構する車が現れ、規制の難しさを改めて痛感しました。

その他、不法駐車の大半は、無許可車両と思われるが、無許可車両が駐車場に入り込むため許可車両が不法駐車せざるを得ないという例もあります。職員駐車場には常に50～70台程度の無許可車両が見受けられます。不法駐車箇所としては、臨床講義棟横、本部管理棟東側、学生通用門入口付近及びテニスコート・体育館側の路上などが挙げられます。これらの路上駐車は、大型車両による荷物の搬入や重油運搬車両の通行に支障を来たすばかりでなく、火災等事故時の緊急車両の通行にも支障を来たすので厳に慎んでもらいたいものです。

テニスコート・体育館側の路上に駐車している車の大部分は病院入口より警備員の制止を振り切って入構してきた車、あるいは警備員のいなくなる正午以降に入構して来る学生の車であります。警備員の話によりますと、制止しようとして車に近づくと猛スピードで振り切って行くので恐ろしくて近づけないそうです。一步間違えば大変な事故になりかねません。命の貴さを身をもって学ぶべき医科大学の構内でこのような危険行為が行なわれたことは誠に遺憾な事です。昨年、男子学生の車及び女子学生の車が警備員の制止を振り切っていた現場に出会い、指導したことがあります。その男子学生はその後も不法駐車をを行い、副学長から嚴重注意の処分を受けています。

不法駐車や無許可車両の入構は学生ばかりではありません。一般に違法行為をする者には、規制遵守の意義を認めないタイプと利便性追求型(例えば駐車違反が悪いことは判っているがその規則を遵守する気持はどちらかというと薄い)に分けられるでしょう。後者は説得しやすいのですが、前者は説得困難であります。今日では残念ながら前者に属するタイプが増えてきて、駐車場に関する諸問題がひとりひとりの人間性、良心や公徳心だけに頼って処理されるという状況ではすでにないと感じられます。今後の問題点として、このような危険行為による重大事故を未然に防ぐためにも、警備員の増員を含めた改善策について検討する必要があると思われます。

平成2年度駐車場問題専門委員会委員

(物理学・谷本光穂)



テニスコート・体育館側路上駐車現況(平成3年4月24日撮影)

医大祭実行委員会より

「起死回生」への手探り ～あるいはマンパワーと大ナタ～

医大祭実行委員会委員長 薄 井 広 樹

今年の医大祭のテーマは、「起死回生」である。
なぜ「起死回生」なのかというと、起死回生しなければ死んでしまうからである。
死にそうなのである。

昨年の医大祭は、実行委員が4人（ノ）という逆境を見事にはね返し、つつがなく終わった。全く恐ろしい先輩方であることよ。俺には絶対真似できんな。

でも、それだけスーパーな先輩方であっても、わずか4人ではちと分が悪かったと見える。その証拠として、学祭委員会としての企画がなかった。前夜祭も、講演会も何もなかった。もちろん、去年の人数でそれを望むのは無謀なのであって、その分のエネルギーを実務に割いたおかげで学祭が成功したわけであるから、それはそれで正しい方法論ではあったと思う。

で、今年度。昨年だけでなく、ここ数年で急速に進んだ医学展の減少による模擬店／医学展バランスの崩壊、学祭そのものに対する関心の減少などなど、多くの病巣を抱える医大祭は、ひと足先に世紀末である。というよ

り、晩年である。どうかしなければいけない。

だから、どうかしてしまうのである。

どうするかというと、まず人を集める。いざというときはやっぱりマンパワーだからね。

そして、大ナタをふるうのである。

例えば、今まで学祭委員会がやっていた模擬店の監督であるが、今年は模擬店委員会が行う。そんなもんあったけ、と不思議に思われる方もいらっしゃるだろうが、その通り。今度新しくできたのだから知らなくて当然だ。

そうすると、学祭委の仕事が少し減るな。その分業をしてもいいのだが、今回は起死回生なのだ。眠ると死んでしまうのだ。というわけで、余力は学祭委員会独自の企画につき込むことになっているのである。

今年の方法論は、「マンパワーによる大ナタ」である。

これが若返り手術になるか、それとも延命手術にすぎないのか、はたまた逆に寿命を縮めてしまうのか。

結果は6月13日から16日までの4日間に出る。

我々は、我々が正しいことを信じたい。

信じるしかないのだ。もう後戻りはできないのだから。

平成3年度の主な行事

今年度の主な行事は次のとおりです。

4月5日	入学式
4月15日～16日	新入生研修（第1回目）
6月13日～16日	医大祭
9月4日	体育大会
9月25日	解剖体慰霊式
10月28日～31日	新入生研修（第2回目）
11月1日	
11月5日	本学記念日
3月25日	卒業式

平成3年度運営組織

本学には、医学教育についての調査研究、教育課程の編集、修学指導、授業及び試験の実施、単位の修得及び履修、学籍関係等について審議する機関として教務委員会があります。

また、学生の厚生補導に関する調査研究、学生の課外活動、福利厚生等について審議する機関として厚生補導委員会があります。

両委員会の平成3年度の委員は次のとおりです。

〈教務委員会〉

委員長	安孫子 保（副学長）
副委員長	清水 哲也（図書館長）
委員	岡田 雅勝（第1学年担当）
	内田 倅喜（第2学年担当）
	東 匡伸（第3学年担当）
	小川 勝洋（第4学年担当）
	水戸 勉郎（第5学年担当）
	小川 秀道（第6学年担当）
	岩 濶次郎・森 茂美
	久 保良彦

〈厚生補導委員会〉

委員長	安孫子 保（副学長）
副委員長	美 甘 和 哉
委員	原田 一典・奥野 晃正
	松岡 悦子・竹光 義治
	小野 一幸・小川 秀道
	金 沢 徹・酒 木 保
	市 原 和 夫



留学生寄稿

旭川医大での留学生生活を偲んで

中国広州中医学院 李 万 瑶
針灸系経絡教研室

悠們好！（皆さんお元気ですか？）
光陰似箭、（光陰矢の如し。）

月日の経つのは速いもので、私が旭川医大での留学を終えて帰国してから早や1年以上経ちました。

留学中は大学の皆様方に大変親切にして頂き有難うございました。とくに私の留学を実現させて下さった麻醉学教室の小川教授には、滞在期間中、研究のご指導から保証人として生活面のことまで色々お世話になりました。本紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

私は帰国後もここ広州市の三元里にある広州中医学院（Gang Zuoh College of Traditional Chinese Medicine）の針灸学部経絡研究室で研究に従事しています。

広州は日本でもご存知の方が多いと思いますが、香港から少し西に入ったところにある広東省の省都で、中国では最も近代化の進んだ都市です。人口は300万人、周辺地区を合わせると500万人以上になり、ほぼ北海道の全人口に匹敵します。

さて私が旭川医大に留学することになったのは、1986年9月小川教授が私共の大学の招きで講演されたのがきっかけです。先生の演題はたしか「日本における疼痛治療面の進歩」であったと思います。これをお聴きした時点では、私が旭川医大に留学することになるとは夢にも思っておりませんでした。その後私共の大学から指名され、留学を許可された時には一瞬驚きと共に希望に胸がときめきました。しかし国外旅行の経験のない私にとっては人知れず不安でもありました。何よりも夫やまだ1歳にも満たない子供と離れて行かねばならないのが一番つらいことでありました。幸い海南島に住む主人の両親が子供の面倒をみてくれることになり、あずけに行きましたが、帰り途は本当に後髪を引かれる思いでした。次は旭川の気候や風土が大変心配でした。広州は中国でもずっと南の方にあり年中温暖で、北国に住んだことのない私には厳寒期に-30℃にもなるという旭川の気候は想像もつきませんでした。でも教授のお手紙の中に「旭川には36万人住んでいるが、今時冬に凍死するような人は1人もいない……」とあり、この一言で不安は一気に解消しました。

旭川には1989年1月22日の夕方に着きました。1月15日に広州を立ち、上海までは汽車で、上海から神戸までは中国船で行きました。神戸から敦賀までは汽車で、敦賀から小樽まではフェリーボートで、小樽から旭川までは札幌乗り換えで汽車で行きました。駅には当時小児科に留学していた張道華さんが迎えに来ていてくれました。宿舎には張道華さんのほか、中国人留学生としては整形

外科の魏新榮さん、産婦人科の于立志さんが住んでおられ、皆で歓迎してくれました。

翌日、学長室ほか2、3の部屋に挨拶廻りをしたのち直ちに研究生生活が始まりました。テーマは「経穴刺激による鎮痛効果および麻酔による経絡現象の変化に関する研究」が与えられました。

さて研究面ばかりでなく、実際生活面でも一番障害になったのはやはり言葉の問題でした。学生時代に外国語としては英語を選択したため、来学時日本語は殆んどできませんでした。とに角日本語を話せるようにならなければ私も必死でした。一日の仕事が終わってから毎晩医局でテープレコーダを使って日本語の練習です。このことで皆様にもご迷惑をおかけしたと思いますが、教授をはじめ教室の皆さんが忙しい中を色々親切に応援して下さいました。最初の3ヶ月は本当に無我夢中でした。しかしこのことは後で色々役立つと思います。私達の大学には世界各国から多数の留学生がきていますが、毎年日本からの留学生もおり、受け入れに関しての書類のチェックとか受入れ後のガイダンス等に私もしばしば狩り出されています。これらの面では微力ながら日中友好に貢献しているつもりです。

旭川医大での研究期間中、私は皆様から色々なことを学びました。日本の先進的科学機器の発達には目をみはるものがあり、随分と視野が広がりました。わが国にも同種の機器がありますが、大学等規模の大きい施設に限られており、普及するには今後の発展を待たねばなりません。また日本では研究を推進させる上で事を運ぶのがとても速いのに驚きました。教授の性格にもよるのでしょうか、前述した私の研究のための器械設備もまたたく間に揃えて頂きました。これも一面では日本全体の生産効率が高いことによるものだと思います。教授はまた折にふれ私達研究者の素養として、

1. Unlimited curiosity,
2. Unlimited enthusiasm
3. Unlimited continuity

を挙げられ毎日が本当に充実しておりました。留学期間中には4回も学会発表をさせられました。経穴での皮膚通電性と麻酔に関する研究は帰国後も継続し、それらの結果は本年6月27日より沈陽で開催される中医薬国際学術会議で教授と共同発表することになり、目下その準備に忙殺されております。

以上、旭川医大での思い出と現況報告をさせて頂きました。厳師であり慈父でもある小川教授の健康を祈念し、また旭川医大のますますの発展と日中友好を願って乾杯。

研究室紹介

■ 衛生学講座 ■

杉澤 孝久

衛生学講座は、昭和50年4月、初代の河原林忠夫教授によって開講されました。現在のスタッフは山村晃太郎(教授)、寺山和幸(講師)、松井利仁(助手)、石田明(助手)、沢山陽子嬢(事務官)の5人のほか研究生が数名の小さな講座です。

研究対象は当初、室内空気の細菌汚染に関するものが中心でしたが、昭和58年5月、山村教授が教室を引き継いでからは主として物理的環境の生体に与える影響に的を絞って研究を行っています。

山村教授は就任以来これまで、主に労働衛生の立場から騒音暴露の聴器への影響について、モルモット蝸牛マイクロフォン電位、活動電位、蝸牛直流電位など内耳電気生理学的指標により研究を進めています。寺山講師は、労働衛生の立場から、鉛中毒と貧血の関係を追及しており、現在は鉛をラットに投与し血中鉛レベルの増加にともなう赤血球膜の変化と赤血球寿命の短縮について研究しています。松井助手は、衛生工学の立場から、環境騒音、特に道路交通騒音のアセスメント手法に関する研究を行っています。保健所の所長を5年間経験した石田助手は昨年、当講座に転向しましたが、教授とともにモルモットを使い超音波の内耳に及ぼす影響を電気生理学的

に追求しています。

この他にも、騒音の生体反応をできるだけ客観的に把握することを目標として、ラットや人間を対象にして変動騒音の自律神経系に及ぼす影響を測定する事を試みています。この面は札幌学院大の澤田教授が追求しています。北大医学部衛生学(現)の神山講師は保健所をフィールドとしていわゆる子供の熱性ケイレンについて多面的に研究を進め、これをまとめつつあります。また、本学出身(11期)の杉沢は稚内保健所に勤務していますが時々教室に顔を出して実験に参加してキュウキュウとしばらくられています。

以上のように、さまざまな方向から研究を進めていますが、単に研究のための研究ではなく、実践的な研究を目指し、低レベルの騒音や微量の環境物質の影響を把握することを常に検討しています。

社会医学は環境サイドから発想する学問ですが、社会の中における健康状態を定量的に把握してその予防に役買うことが目的です。現代の科学はミクロの生体の機能の解明が急速に進歩しているので、マクロな面に後輩の皆さんの眼が向かないのも当然かもしれません。しかし、卒業して実地医家になってから、社会医学の役割を思い出すのが大方です。それにしてもだんだんと予防医学を指向する医師が増えてきているのは心強く思います。

研究室紹介

■ 泌尿器科学講座 ■

橋本 博

泌尿器科学講座は現在、八竹教授以下10名のスタッフと、研修医1名、大学院生3名とで構成されています。医局員の数の割に、関連病院数が多い(12病院)ためか、大学に居る人数が、なかなか増えないのが悩みの種です。

このように少ない人数で、病棟、外来診療、手術、講義、学生実習等の仕事をこなさなければならないので、多忙な毎日ではありますが、何とか時間をやりくりしつつ、臨床並びに基礎研究が進められています。

八竹教授は尿路結石、神経泌尿器科を専門としており、その指導のもと、尿路結石については森川助手、山口助手により研究が進められています。結石形成を阻止する尿中高分子物質の分離同定が現在の中心テーマですが、数年来の努力が実り、もう一步の所まで来ており、将来の臨床応用へ向けて、期待が高まりつつあります。副甲状腺疾患についての臨床的、及びラットを用いた基礎的研究も進みつつあります。神経泌尿器科には、神経因性膀胱、尿失禁、インポテンスの研究等がありますが、高齢化社会に向けて、最近大変注目されている領域です。金子講師、宮田助手、水永助手がこれらを担当し、多彩な研究が展開されています。臨床面では、脊損者や二分

脊椎児の尿路管理、尿流量測定に関する研究、脳電図を用いた上位中枢の研究、夜間陰莖勃起現象の研究等がホットな話題を提供しています。基礎研究としては、電気生理学的手法を使った排尿中枢の研究が、ネコを用いて行なわれ、また、膀胱収縮を抑制する薬剤に関する検討も行なわれています。

徳中助教授は、筋疾患の研究を進めており、かつての巨大尿管や逆流尿管の筋構造の研究から、更に尿道括約筋に関する研究へと展開しています。兔及びヒト材料を用いて、生化学的、形態学的に尿道括約筋の筋型を明らかにし、泌尿器科領域における神経筋疾患への新しいアプローチとして注目されています。最近では加齢による変化に着目し、高齢者の尿失禁の病態を解明する手懸かりになるものと、期待されています。藤井助手は、徳中助教授の指導のもと、電気刺激による括約筋の筋型変化に関する研究を行っており、兔を用いて非常に明快なデータを得ています。

悪性腫瘍に関する研究は、橋本講師、西原助手を中心に、BrdU標識法やcollagenase産生態に着目した癌の悪性度の評価、膀胱内注入抗癌剤の組織移行増強に関する研究等が行なわれています。抗癌剤の組織移行に関しては、ある種の薬剤処理により、数倍の腫瘍組織内濃度を得られることがわかり、臨床応用も期待されています。

以上のような研究活動に、一人でも多くの方が参入してくれることを、教職員一同心から希望しています。

平成3年度大学院入学者名簿

学 生 氏 名	専 攻	研究指導教官
西脇 邦彦	細胞・器官系	清水 哲也
石 勝	〃	〃
萩 信一	生体情報調節系	並木 正義
渡邊 真司	〃	〃
長嶋 雄一	〃	〃
福田 桂子	〃	保坂 明郎
本間 裕	〃	海野 徳二
横山 貴康	〃	〃
富田 一郎	〃	水戸 勉郎
真鍋 公也	〃	飯塚 一
小林 博也	〃	〃
川田 勝己	〃	小川 秀道
坂爪 悟	生体防御機構系	奥野 晃正
古谷 伸	〃	〃
二木 源	〃	片桐 一
ホーク アナサール エーサナル	生体情報調節系	安孫子 保

— 教 官 の 異 動 —

【停年退官】

安田 博 H3.3.31 数学・教授

【転入】

山内 一也 H3.4.1 数学・教授

【転出】

加地 隆 H3.4.1 弘前大学医学部・教授

【昇任】

松尾 忍 H3.4.1 皮膚科学講座・助教授

高草木 薫 H3.4.1 生理学第二講座・講師

第13回卒業証書授与式

第13回卒業生 121名（うち女子25名）への卒業証書授与式が、3月25日（月）10時30分から本学体育館において挙行された。

式では、室内合奏団が奏でる調べのなか、学長から卒業生一人ひとりに卒業証書が手渡された。

ついで学長から門出にあたり式辞が述べられた。

（学生課）



平成2年度学位記受領者名簿

氏 名	課程・論文の別	学位記授与年月日
井上 仁	課程 博士	平成2年6月29日
池田 喜篤	課程 博士	平成2年6月29日
今本 哲	論文 博士	平成2年6月29日
浦本 等	論文 博士	平成2年6月29日
竹中 孝	論文 博士	平成2年6月29日
河井 裕	論文 博士	平成2年6月29日
酒井 博	課程 博士	平成2年9月28日
竹村 清	論文 博士	平成2年9月28日
上田 大	論文 博士	平成2年9月28日
稲葉 聡	課程 博士	平成2年12月25日
小川 裕	論文 博士	平成2年12月25日
高村 祐	論文 博士	平成2年12月25日
高塩 哲	論文 博士	平成2年12月25日
棚澤 哲	論文 博士	平成2年12月25日
石子 智	課程 博士	平成3年3月25日
安達 俊	課程 博士	平成3年3月25日
川邊 淳	課程 博士	平成3年3月25日
佐藤 伸	課程 博士	平成3年3月25日
奈藤 吉	課程 博士	平成3年3月25日
亀上 敏	課程 博士	平成3年3月25日
柴田 敏	課程 博士	平成3年3月25日
稲垣 光	課程 博士	平成3年3月25日
吉田 礼	課程 博士	平成3年3月25日
西條 政	課程 博士	平成3年3月25日
蒔田 芳	課程 博士	平成3年3月25日
木津 明	課程 博士	平成3年3月25日
布井 明	課程 博士	平成3年3月25日
武藤 福	課程 博士	平成3年3月25日
大田 人	課程 博士	平成3年3月25日
大原 明	論文 博士	平成3年3月25日
大 島 英	論文 博士	平成3年3月25日

第1回新入生研修実施される

平成3年度新入生研修（第1回目）が、4月15日（月）・16日（火）の両日開催された。

第1日目はA組、第2日目はB組を対象に実施された。研修は新入生を12～13名のグループに分け、1グループに一般教育の教官1名と基礎又は臨床の教授1名の計2名があたり、自己紹介について勉学上の問題あるいは学生生活全般について指導助言ならびに懇談が行われた。

（学生課）



平成3年度入学式

平成3年度入学式が、4月5日(金)10時から本学体育館において挙行された。

式では、本学では初めての外国人留学生を含めた新生101名(うち女子学生16名)を代表して朝井裕一君が宣誓。ついで、学長式辞があり、新生は医学生としての自覚を新たに、大学生活の一步を踏み出した。

(学生課)



東医体夏季・冬季総合優勝!

第33回東医体は、3月22日の冬季大会閉会式をもって、全日程が終了した。夏季大会の準優勝に引き続き冬季大会でもスキー部、ラグビー部、アイスホッケー部の活躍により準優勝を果たし、夏季・冬季総合で優勝という金字塔を打ち立てた。これは第18回大会(昭和50年度)に本学が初参加して以来初の快挙である。

第33回東医体夏季・冬季総合成績

	大 学 名	総合得点	夏季得点	冬季得点
優 勝	旭川医科大学	90.0	68.0	22
準優勝	新潟大学医学部	85.5	77.5	8
3 位	群馬大学医学部	77.75	53.75	2
4 位	自治医科大学	75.5	65.0	10.5
5 位	北海道大学医学部	73.5	60.5	13
6 位	筑波大学医学専門学群	71.0	66.0	5
7 位	東北大学医学部	68.5	58.0	10.5
8 位	弘前大学医学部	62.0	56.0	6
9 位	東京医科大学	61.0	53.0	8
10 位	慶応義塾大学医学部	59.5	56.5	3

東医体冬季総合準優勝!

スキー部門総合優勝する

【アルペン部門】

- 男子スーパーG■ ■男子大回転■ ■男子回転■
 7位 玉越 拓磨 9位 前多 一彦 優勝 加藤 祐司
 9位 讃井 将満 準優勝 水上 裕輔
 10位 竹田 真純

- 女子大回転■
 準優勝 飛世 桂
 4位 山下 智子

【クロスカントリー部門】

- 男子15km■ ■男子8km■ ■男子リレー■
 優勝 穴倉 朋胤 優勝 穴倉 朋胤 優勝 鈴木 昭広
 4位 鹿野 恒 4位 鹿野 恒 鹿野 恒
 5位 鈴木 昭広 7位 鈴木 昭広 田伏 英晶
 穴倉 朋胤

- 女子5km■ ■女子3km■
 優勝 黒木 文子 4位 辻 由紀子
 3位 辻 由紀子 5位 黒木 文子
 5位 由良 知春 7位 蒲池由美子
 7位 蒲池由美子 8位 由良 知春



アイスホッケー部 旭川市長杯2連覇なる!

前号で紹介した旭川市長杯の結果は期待どおり2連覇を達成した。職員との混成チームとはいえ実力は確実に向上しており今年の東医体の成績に注目したい。

成績結果

- 準決勝 旭川医科大学 13対6 S.C.チーフス
 決勝 〃 10対5 CA-TVポテト

学生の定期健康診断の実施について

平成3年度の学生の定期健康診断を、下記のとおり実施するので全員受検すること。

なお、定期健康診断を受検しない者は、「健康診断書」を発行できないので注意すること。

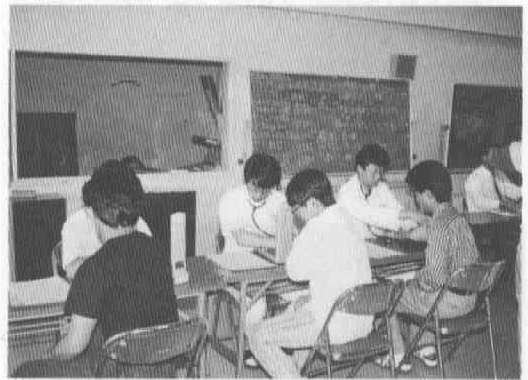
記

日 時 5月29日(水) 12:30~15:30
(原則として第1・2学年)
6月1日(土) 12:30~14:30
(原則として第5・6学年)
6月5日(水) 12:30~15:30
(原則として第3・4学年)

※大学院生については、いずれかの都合の良い日に受検すること。

場 所 保健管理センター

検査項目 胸部X線、身長、体重、視力、検尿、血圧、
内科検診



「野生の生物」

以前、野生のマウスを自分でワナを仕掛けて捕まえ、松果体の季節変動を調べたことがありました。ネズミという子供の頃、家の中や周辺で見かけたりしたことはありましたが、以後は研究室で飼育していた実験用の白いマウスやラット位しか見たことがありませんでした。ワナを仕掛ける要領は最初に動物学者のQuay教授から教わりましたが、翌日からは毎朝自分で大学に行く途中に獲物をチェックしました。小型のリスやモグラがかかったこともありましたが、主に捕獲したのは学名Peromyscus leucopus (シロアシネズミ) といって、長い尾をもち、毛色は成熟すると背中側が褐色または金色、腹部から四肢にかけては白色の可愛い顔のマウスで、この時以来、子供の頃から持ち続けてきた私のネズミに対する悪い印象はすっかり変わってしまいました。この野生マウスの自然条件のもとでの研究は、森と湖に囲まれたウィスコンシン大学ならではのものです、夜明けとほぼ同時に研究室にパッと点灯されるというQuay先生のエネルギッシュな仕事振りと共に、最も印象的な留学時代の思い出です。

野生の生物というもう一つ。私の家庭の周辺は、白・黄・ピンク・青・紫色等の花をつける様々な野草がのびのびと生い茂り、夏になる頃には身の丈をこえる程にもなるものもあって、まるで野草園のような様相を呈

したものでした。また別の片隅には、秋になると小さな赤い実を沢山つけ、それを求めて野鳥が飛来する野生のリンゴの木がありました。美しい濃いピンク色の蕾が6月の大学祭の頃になると一斉に花開き、真白な花が美事に木全体を埋め尽します。手入れなど全くしないのに毎年これを繰返し、新しいわき芽は傍らの地中から次から次へと伸び出てきます。その小さな木を無造作に移植しても楽々と生着し、数年もすればその木もまた花をつける程に迄生育します。鑑賞用の植物が環境に気を配らなければすぐに弱ったり、死んでしまったりするのは対照的です。私はほとんど手をかけなくとも逞しく生き残り、生長し、繁茂する野生の植物を見る度に自然の力の偉大さに打たれます。

昔、日高に入植した人達は苦勞して野生の馬を飼ひ慣らし、牧場をつくったといひます。時が移り競馬が盛んになると、輸入したサラブレッドをその牧場で飼育・繁殖させ、今では競走馬の名産地として全国的に有名になっています。

野生の動物にたとえては大変失礼ですが、学生の色々なクラブ活動に関係して感じてくることが、クラブの創設期には一般にバイタリティーに富んだ逞しい人達が多く、その人達が築いたクラブの中に次第に野生的というよりはもっと洗練された感じの、専門的能力に秀でた人達が加入してきてクラブ本来の目的がより明確に実現されるようになることが多いということです。旭川医大のクラブ活動での学生諸君の盛大な活躍ぶりに感動すると共に、創設期における先輩諸君のご苦勞を懐しく想ひ起します。

今、北海道の隣り青森県の、リンゴと桜で有名な弘前の地で、縮切りに追われながらこの原稿を書いています。17年間にわたる皆様からのご厚情を感謝すると共に、これからも相変わらずご交誼の程をお願いします。最後に旭川医大の今後の発展と皆様のご健康をお祈りします。